



日本消化器癌発生学会

News Letter

<http://plaza.umin.ac.jp/~jsgc/>

2003 No.1

第14回消化器癌発生学会準備報告

この度、第14回日本消化器癌発生学会総会を金沢で開催させていただきますことを、大変光栄に存じますとともに、昨年新しく理事長にご就任された杉町 圭蔵先生をはじめとする諸先生方に深く感謝申し上げます。学術集会は平成15年9月11日（木）、12日（金）の二日間、ホテル日航金沢で行う予定で鋭意準備中であります。

今回の主題として、「消化器における癌予防」を選択させていただきました。癌予防は21世紀のoncologyにおける重要なテーマのひとつであります。手術、放射線、化学療法など癌に対する各種の治療が格段に進歩したことはすばらしいことですが、依然として手に負えない高度に進行した癌も存在し、また治療には患者さんのみならず家族に多大な負担がかかるのも事実であります。さらに最近では医療費の高騰により国家予算の逼迫も危惧されるようになり、癌の発生そのものを抑制する「癌予防」の考え方が注目されるようになったわけです。本学会は消化器癌の発生に関する研究を主眼においてきた経緯があり、まさに旗手としてこの分野をリードして行くべきであろうと考えております。

第14回の学会では、癌発生の予防のみならず、いわゆる前癌病変と考えられている疾患たとえば大腸腺腫、ヘリコバクター胃炎、Barrett食道、C型肝炎などの発生の予防も対象にしたいと考えております。また方法についても、chemoprevention、surgical intervention、各種の食物による予防など、幅広く演題を募集したいと存じます。このテーマについて、疫学的、臨床的、分子生物学的、医療経済学的なアプローチから検討していただきたいと思います。特に発生頻度の高い胃癌、大腸癌、肝癌に関しまして、その予防をテーマに三つの特別シンポジウムを企画させていただきました。

また特別講演として、ジョンズ・ホプキンス大学のJohn W. Harmon教授に、十二指腸液の食道への逆流がもたらす影響について、Barrett食道・食道腺癌の発生や、それらの予防について、ご講演をいただく予定です。

本学術集会が、癌予防研究の発展につながることを期待して、ぜひたくさんの先生方からの演題の応募をお待

ちしております。9月の金沢は残暑の中にも秋の気配が感じられる頃です。皆様のご参加を重ねてお待ちしております。

金沢大学大学院医学系研究科
がん局所制御学
第14回日本消化器癌発生学会
会長 三輪 晃一



会長 三輪晃一先生



会場 ホテル日航金沢

目次

第14回消化器癌発生学会準備報告	1
第13回日本消化器癌発生学会総会報告	2
シンポジウム	3
理事長に就任して	4
役員名簿	4
名誉理事長挨拶	5
掲載論文一覧	6
理事会議事録	7
第3回消化器癌国際会議のお知らせ	8
編集後記	8

第13回日本消化器癌発生学会総会報告

第13回日本消化器癌発生学会総会は、門田守人当番会長のもと、平成14年9月5～6日の2日間にわたり、大阪、豊中市の千里ライフサイエンスセンターで開催されました。

今学会では、基調テーマを「消化器癌における基礎と臨床の接点」とし、あえてシンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップの主題を前もって決めずに、消化器癌における前癌病変、発癌予測、予防、分化制御、炎症の関与、遺伝子解析、遺伝子変化、エピジェネティックな変化、分子標的治療、転移の基礎と臨床、抗癌剤・放射線感受性、免疫療法、遺伝子治療、二次発癌など様々なテーマで広く演題を募集させていただきました。その中より、基礎的研究から臨床研究につながる優れた演題を選び、シンポジウムとして「消化器癌における遺伝子異常」、「消化器癌転移の基礎と臨床」、「消化器癌における網羅的遺伝子解析-基礎と臨床-」の3項目、パネルディスカッションとして、「Helicobacter pylori感染と胃癌」、「消化器癌における抗癌剤、放射線感受性」の2項目、ワークショップとして「環境因子と消化器癌の発生・進展」、「消化器癌における免疫治療・遺伝子治療」、「消化器癌の分子標的」の3項目を企画させていただきました。本学会の特徴である「自分の専門領域のみならず広く消化器各臓器の癌に対する新しい知見が得られる」ことに役立つことができたと考えます。また、今回は、臨床研究の基本に立ち戻り、「症例から振り返る」というセッションを設け、消化器癌の発生や進展を研究していくために興味ある示唆に富む症例報告をして頂きました。派手さは無くとも基調テーマである「基礎と臨床の接点」のもっともprimitiveな点を反映したセッションであったかと思います。

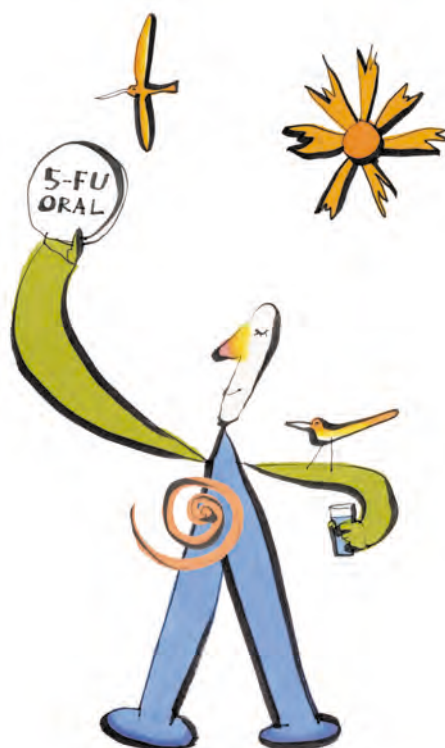
特別講演として、消化器癌とくに大腸癌の発生と進展に関わる分子生物学的研究において数々の業績をあげられているミシガン大学教授でEric R. Fearon, MD, Ph.D 教授に"Insights into the Molecular Alterations Underlying the Pathogenesis of Colorectal Carcinoma".と言う演題でご講演いただき、消化器癌発生の典型的なモデルである大腸癌における最新の研究成果を聞くことができました。さらに、セミナーとして、基礎的な研究から消化器癌の予防につながるご講演としてCOX-2と消化器癌に関する話

題を京都大学の武藤先生に、基礎的研究から臨床研究への橋渡しとして、DNAアレイを活用したテイラード癌化学療法の話題を広島大学の西山先生にご講演いただきました。また、基礎研究から得られた成果を臨床に反映した研究成果として、肝転移に対する動注療法の話題を東海大学の貞廣先生に、肝癌に対する新しい治療戦略の話題を大阪大学の左近先生にご講演していただくことが出来ました。

参加者総数は約250名と必ずしも大きな学会ではありませんでしたが、参加者の皆様のおかげで、最新の研究成果に対して基礎的な面からと臨床的な面から活発な議論が繰り広げられ、「消化器癌における基礎と臨床の接点」という基調テーマを満足させる学術総会が行えたものと思われます。これも参加者の皆様と総会の運営に協力していただいた大阪大学大学院病態制御外科の医局員の皆様のおかげであり、この場をお借りして、お礼を述べさせていただきます。

第13回日本消化器癌発生学会事務局 担当：中森 正二

飲む
5-FU



癌化学療法はQOLの時代

抗悪性腫瘍内服剤

創薬/指定医薬品/要指示医薬品*

〔薬価基準収載〕

5-FU錠₁₀₀協和

5-FU Tablets Kyowa

フルオロウラシル製剤 50mg・100mg錠

*注意-医師等の処方せん・指示により使用すること

●「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意事項」は製品添付文書をご参照ください。



KYOWA

製造発売元 (資料請求先)
協和発酵工業株式会社
東京都千代田区大手町1-6-1
<http://kyaku.kyowa.co.jp/>

02.12.



シンポジウム1 消化器癌における遺伝子異常

座長：塩崎 均、今井浩三

消化器癌の発生、浸潤転移における遺伝子異常の解析、ならびにその臨床応用に関する10演題の発表があり、各演題に活発な討議が展開された。

食道癌におけるコネキシン43遺伝子高発現は浸潤転移や抗癌剤感受性に関与する。胃癌についてはMMP-1 promoterにおける2G alleleの存在、p53 related protein kinase (PRPK) 発現、Rasシグナル伝達系に関与するRIN1 variant遺伝子やp27制御因子Skp2 (S-phase kinase-associated protein2) の発現異常が胃癌の発生、浸潤転移に関与し悪性度の指標となる可能性が示唆された。また、新しいメチル化スクリーニング法 (MCA法) により胃癌で不活化している新たな癌抑制遺伝子の同定の可能性が示された。一方、大腸癌においては前述のRIN1 variant 遺伝子、DNA修復遺伝子であるO6-methyl-DNA methyltransferase (MGMT) の機能異常、 β カテニンの特異的活性化、brain-type glycogen phosphorylase (BGP) が大腸癌の発生、浸潤転移に関与していることを示した。また、大腸癌肝転移に関与する遺伝子群を新しい解析処理 (ニューラルネットワーク処理) により同定し、臨床応用する試みなどが報告された。これらの研究が臨床の場で利用される日が来ることを念じている。

(塩崎均)

シンポジウム2 消化器癌転移の基礎と臨床

座長：新津洋司郎、名川弘一

本シンポジウム消化器癌転移の基礎と臨床は9題の演題が多様で、いずれも質の高いものであったが、紙面の関係上、特に司会者が興味深いと思われた2~3を取り上げてみたい。

まず演題1 (札幌大第1外科) はヒト胃癌細胞株から樹立した高転移株についてDNA chipを用いて様々な遺伝子発現の変動を明らかにしたものであるが、今後は患者材料での検討が必要と思われた。演題2 (熊本大第2外科) は胃癌患者の腹腔洗浄液中の癌細胞をCEAやCK20のRT-PCRで検出する試みで、今後の治療への応用が期待された。演題4 (大阪成人病センター病理) はガストリン前駆物質 (G-Gly) がMMPの活性化、産生亢進を介して大腸癌の浸潤を促進することを示し、演題5 (大阪市立大腫瘍外科) は膵臓由来uPAが、やはり癌に由来するTrypsinogenを活性化し浸潤を強めることを明らかにしたもので、いずれもきちんとした研究であった。演題6 (奈良県立医大がんセンター腫瘍病理) は癌細胞が産生するIL15とHIF1の増加を介して腫瘍周囲のVEGF発現が誘導されることを示したユニークな発表であった。会場は最後まで熱気溢れる討論が続いた。

(新津洋司郎)

シンポジウム3 消化器癌における網羅的遺伝子解析
—基礎と臨床—

座長：森 正樹、安井 弥

本シンポジウムでは消化器癌に発現する遺伝子を網羅的手法を用いて解析し、それを臨床応用する試みを行っている研究が7題発表された。

最初の4題は遺伝子発現プロファイル解析をより効率的に行うための改良あるいは工夫についての報告であった。まず東京大学の大塚らは消化器の各臓器の遺伝子発現プロファイルの検討から、異なる臓器組織では発現遺伝子が大きく異なること、このため効率的な研究のためには消化器系組織に特化したcDNAセットが必要であることを報告した。次に札幌医大の豊田らはゲノム上のp53結合配列を瞬時に予測できるコンピューターシステムを開発し、従来の煩雑で労力の多い作業の飛躍的効率化に成功したことを報告した。また大阪大学の竹政らはDNAチップを用いた遺伝子発現プロファイルから得られた膨大な情報を、効率良く解析するための手法について二つの手法を比較しながら報告した。さらに大阪大学の黒川らは、ATAC-PCRの技術を用いたPCR-arrayの有用性と可能性を示した。いずれも今後このような解析を進める上で重要な課題になると思われる。

次の3題はcDNAマイクロアレイを実際に臨床応用しようとする発表であった。東京大学の伊地知らはcDNAマイクロアレイをシグナル伝達経路の研究に応用し、膵癌細胞ではTGF-betaシグナル伝達経路のなかでSmadに依存しない経路があることを明らかにした。最後の2題はcDNAマイクロアレイを抗癌剤感受性の予測に利用する研究で、横浜市立大学の清水らは5-FUに対する大腸癌の獲得耐性株の検討より、5-FU感受性予測遺伝子セットを作成し、その有用性を示した。また東京大学の森山らは同様に肝癌細胞を用いて5-FU、IFN-alpha併用療法に関する遺伝子を抽出し、その有用性を報告した。

以上本シンポジウムでは消化器癌の網羅的遺伝子解析をcDNAマイクロアレイを用いて行う際の工夫、実際の有用性などについて報告された。種々の解決すべき問題はあっても、cDNAマイクロアレイを用いた網羅的遺伝子解析研究は今後汎用され、多くの有益な情報をもたらすものと期待される。

(森 正樹)

ワークショップ3 消化器癌の分子標的

座長：前原喜彦、横崎 宏

消化器癌の診断、治療への応用が期待される新たな分子標的についての5演題が発表された。臓器特異的な分子標的に関しては、SEREX法による検索から肝細胞癌特異的分子標的としてPSMC3、p27BBP、ribosomal protein L30が見出され (上村ら、岡山大)、COX-2阻害剤が線維芽細胞由来のCOX-2を抑制することによりスキルス胃癌の増殖を抑制する可能性が中澤ら (大阪市大) から報告された。また、堀内ら (獨協医大) はヒト胆嚢癌細胞NOZヌードマウス同所性移植モデルを確立し、MAPK阻害剤による増殖、浸潤、転移能の抑制を確認した。機能特異的分子標的では、線虫類胎生期細胞移動規定遺伝子の相同遺伝子Grb7の単離と、そのシグナル伝達部位をターゲットとした11アミノ酸の非リン酸化環状ペプチドが特異的阻害作用を有するが発表され (田中ら、九州大)、また、細胞周期関連分子標的としてDNA損傷により発現誘導されるT-fimbrin遺伝子がG2/Mチェックポイントに関与し、その抑制が癌治療の標的となる可能性が報告された (佐々木ら、札幌医大)。

(横崎 宏)

理事長に就任して

九州中央病院 院長 杉町 圭蔵

この度、本学会の創設者である大原毅先生の後を引き継いで本学会の理事長に就任致しました。微力ではありますが、本学会の発展の為に全力で努力したいと考えています。

御存知のように本学会は1989年に誕生した消化器癌発生研究会が母体となり、1997年に学会へと発展致しました。本学会の特色は、消化器癌の前癌病変から発生、進展、転移はもとより、発癌予測、予防、遺伝子解析、分子標的治療、抗癌剤・放射線感受性、二次発癌などに関する最先端の研究を、基礎の研究者と臨床医がそれぞれの立場から発表し、ホットなディスカッションを行い、多くの新しい情報を世界に向けて発進しています。

しかし、この学会がまだ若いということもあり、現在、いくつかの問題点をかかえております。その中でも最も大きなものは機関誌の問題であります。これまではイタリアから発行されていたJECCR (Journal of Experimental and Clinical Cancer Research) において本学会で発表された優秀な演題を掲載していただき、機関誌としての役割を持たせていました。ところが、すばらしい研究であっても原著論文は1回だけであり、同じ内容の原著論文を2篇書くことはダブルパブリケーションになることもあり、これまで優秀な研究を発表された方がJECCRには喜んで投稿していただけないという現実がありました。場合によっては投稿をお願いしても断

られることもありました。毎年多額のお金をJECCRに払って、本学会からの論文を掲載していただくのであれば、会員が自分の仕事を是非掲載したいと思うような雑誌と提携できないものだろうかと考えています。

また、本学会は消化器癌の発生に関する研究を専門に行う間口が狭く、奥行の広い学会でありまして、現在、会員数は約900名とごく限られておりますので、会員数をもっと増やし、学会の活性化を計りたいと考えており、この分野の研究に興味をお持ちの方々の入会を心よりお待ちしております。

役員名簿

理事長 杉町 圭蔵

理事 (15名)

愛甲 孝	井藤 久雄	今井 浩三	上西 紀夫
北島 政樹	小西 文雄	杉町 圭蔵	立松 正衛
寺野 彰	平田 公一	磨伊 正義	三輪 晃一
森 正樹	門田 守人	安井 弥	

会長 三輪 晃一

次期会長 今井 浩三

監事 (2名)

小俣 政男 小川 道雄



指定医薬品
プロトンポンプ阻害剤

【薬価基準収載】

パリエット® 錠 10mg
錠 20mg

〈ラベプラゾールナトリウム製剤〉

●効能・効果、用法・用量及び使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

hvc Eisai エーザイ株式会社
ヒューマン・ヘルスケア企業 〒112-8088 東京都文京区小石川4-6-10
http://www.eisai.co.jp

製品に関するお問い合わせ: お客様ホットライン室
☎0120-419-497 9~18時(土、日、祝日 9~17時)

PT0305-1 2003年5月作成

名誉理事長挨拶

大原 毅

この学会もこのたびの門田守人教授の主催で13回を迎えることが出来ました。

1988年に呱呱の声をあげてから早いものです。始めはいつ潰れてもおかしくないようなものでしたが、回を重ねるにつれてその地位も確立し、医学界でも確固たる位置を占めるようになりました。これも皆様のご努力のおかげと、何よりもよい発表をし、その結果を英文論文として世に出すことに努めてきたからでしょう。もちろん分子生物学という時流にも乗ったこともあるのでしょうが、目覚ましく発展いたしました。

本学会は仕事をしている人のための学会で、したがって当初より定年制を設けました。すでに定年を迎えられた方も居られますが、今回創立以来のメンバーである、恩田昌彦先生それに私が定年により役職を引退します。また初期からさわめてアクティブにこの会を発展させてくださった内田雄三、田原榮一両先生も引退されます。次の理事長には杉町圭蔵先生をお願いし、私は名誉理事長にさせていただきました。

このように創成期メンバーは徐々に舞台から去りますが、この学会が非常にユニークな学会として、つまりすべての消化器を通覧して討議するという縦の糸と、基

礎・臨床の壁を取り去って討議するという横の糸とで結ばれているという特徴を遺憾なく発揮して、更に更に発展していくことを心から願っております。もともとこの学会は「逆転の発想」から生まれました。つまり癌の発生の仕組みを知れば、そのことを通じて癌の抑制・予防が出来るという考え方です。最初の時にある教授から、「普通は癌の予防の学会を作るものだが、逆に癌を発生させる学会を作るなんて面白いね」と言われたことを今だに思い出します。

学会誌に関して言えば、最初は日本語の「消化器癌の発生と進展」を10巻まで出しました。よくまとまった今でも思いのある雑誌ですが、プロシーディング形式なので日本の学会では原著として認めないのです。そこで杉町教授にたいへんなお手間をかけてCancerのSupplementとして2巻、その後は新潟青陵大学の曽我淳教授にお世話いただいて現在のJECCR (Journal of Experimental & Clinical Cancer Research) のcollaborative Journalになっているのです。良い論文を英文で発表できる場を作りたいという思想は今でもつづいているのです。

これからも問題点は、英文誌と国際会議でしょう。杉町理事長と会員の皆様のご協力により、大きく発展することを念願しています。何と云ってもこのような趣旨の学会は世界に類を見ないのですから。

—— セファマイシン系抗生物質製剤 〈薬価基準収載〉 ——

セフメタゾン[®]

静注用 2g・1g・0.5g・0.25g
筋注用 0.5g

●指定医薬品 ●要指示医薬品 (注意—医師等の処方せん・指示により使用すること) ●セフメタゾールナトリウム

効能・効果、用法・用量及び禁忌・原則禁忌を含む使用上の注意等は添付文書をご覧ください

SANKYO

製造販売元(資料請求先)

三共株式会社

〒103-8466 東京都中央区日本橋本町三丁目二番

03.6

著 者	所 属	論 文 名	掲 載
掛地 吉弘	九州大学第2外科	Clinical Significance of Vascular Endothelial Growth Factor Expression in Gastric Cancer	vol.21.n1.2002.125-129
古川 文夫	国立医薬品食品衛生研究所病理部	Spontaneous Development of Aberrant Crypt Foci in F344 Rats	vol.21.n2.2002.197-201
岸本 洋輔	鳥取大学臨床病理学	Molecular Changes in the Early Stage of Colon Carcinogenesis in Rats Treated with Azoxymethane	vol.21.n2.2002.203-211
宮地 和人	獨協医科大学第1外科	Correlation between Telomerase Activity and Telomeric Repeat Binding Factors in Gastric Cancer	vol.21.n2.2002.269-275
中山 洋	東京大学腫瘍外科	Rat Gastric Adenocarcinoma Cell Line BV9 Avidly Adheres to Lymphatic Endothelium under Lymphatic Flow Condition	vol.21.n2.2002.289-294
井口 東郎	国立病院九州がんセンター臨床研究部	A Possible Role of VEGF in Osteolytic Bone Metastasis of Hepatocellular Carcinoma	vol.21.n3.2002.309-313
小野 重弘	広島大学第1病理	Acetylated Histone H4 is Reduced in Human Gastric Adenomas and Carcinomas	vol.21.n3.2002.377-382
伴 慎一	埼玉医科大学第2病理	Change in Cytoskeletal Phenotype and Extracellular Matrix Production of Muscularis Mucosae during Early Invasive Colorectal Adenocarcinoma	vol.21.n3.2002.401-408
岡見 次郎	大阪大学病態制御外科	An Immunohistochemical Study of Cyclooxygenase(COX)-2 Expression in Endocrine Tumors of the Pancreas	vol.21.n4.2002.569-576
松倉 則夫	日本医科大学第1外科	Genetic Differences in Interleukin-1 β Polymorphisms among Four Asian Populations; An Analysis of the Asian Paradox between H.pylori and Gastric Cancer Incidence	vol.22.n1.2003.47-55
表原 文江	獨協医科大学病理学	Transcriptional Activation of Cyclin-Dependent Kinase Inhibitor, p21 ^{waf1} Gene by Treatment with a Differentiation Inducing Agent, Vesnarinone in a Human Salivary Gland Cancer Cell Line	vol.22.n1.2003.57-60
葦沢 龍人	東京医科大学八王子医療センター消化器外科	The Clinical Significance of Sialyl Lewis Antigen Expression in the Spread of Gastric Cancer. Flow Cytometric DNA Analysis	vol.22.n1.2003.91-98
藤井 茂彦	獨協医科大学病理学	Usefulness of Analysis of p53 Alteration and Observation of Surface Microstructure for Diagnosis of Ulcerative Colitis-Associated Colorectal Neoplasia	vol.22.n1.2003.107-115
甲斐原 司	獨協医科大学病理学	Dedifferentiation and Decreased Expression of Adhesion Molecules E-cadherin and ZO-1, in Colorectal Cancer are Closely Related to Liver Metastasis	vol.22.n1.2003.117-123
小室 安宏	東京大学腫瘍外科	Prediction of Tumor Radiosensitivity in Rectal Carcinoma Based on p53 and Ku70 Expression	vol.22.n2.2003.223-228
上野 秀晃	広島大学原爆放射能医学研究所腫瘍外科	Prediction of Lymph Node Metastasis by p53, p21 ^{waf1} , and PCNA Expression in Esophageal Cancer Patients	vol.22.n2.2003.239-245
石川 晋之	熊本大学第2外科	Identification of Genes Related to Invasion and Metastasis in Pancreatic Cancer by cDNA Representational Difference Analysis	vol.22.n2.2003.299-306
福島 俊彦	福島県立医科大学第2外科	Mutational Analysis of TGF- β Type II Receptor, Smad2, Smad3, Smad4, Smad6 and Smad7 Genes in Colorectal Cancer	vol.22.n2.2003.315-320
沖元 達也	広島大学第2外科	Gene Therapy for Rat Liver Metastatic Tumors by Intra-Hepatic Arterial Injection of AdCMV-p53 Combined with CDDP	印刷中
石井 雄二	東京慈恵会医科大学外科	A Study on Network about Angiogenesis-Related Matrix Metalloproteinases in Primary Hepatocellular Carcinoma	印刷中
大野 敬祐	札幌医科大学第1外科	Metastatic-Associated Biological Properties and Differential Gene Expression Profiles in Established Highly Liver and Peritoneal Metastatic Cell Lines of Human Pancreatic Cancer	印刷中
伴場 裕巳	埼玉医科大学総合医療センター第1内科	Expression of Cyclooxygenase-2 in Human Hyperplastic Gastric Polyps	印刷中

/ 理 / 事 / 会 / 議 / 事 / 録 /

2003年2月6日

日本消化器癌発生学会理事会議事録

於 都市センターホテル

出席 (敬称略)

杉町 圭蔵 (理事長), 井藤 久雄, 今井 浩三, 上西 紀夫, 立松 正衛,
藤村 隆 (三輪晃一代理), 安井 弥, 森 正樹, 門田 守人

1) 前回理事会・各種委員会議事録確認

機関誌の変更の件について杉町理事長、上西担当理事より説明があった。

本会の機関誌として現在JECCRがあるが、よりレベルの高い雑誌への変更を模索中であり、この経緯が報告された。かなり具体的に話が進んでいたAm J Gastroenterol との交渉は出版社の変更の可能性を理由に中断している。この間に他誌との交渉を進めることが提案された。当方の交渉条件として、補助金額 (年間500万円)、本会で責任をもって査読した論文は年20編程度は無条件に掲載する事が譲れない基本事項として確認された。次のステップとして、当該誌が本会の機関誌であることを記載してもらうこと、本会会員が割引価格で当該誌を購読できることなども交渉課題となることが挙げられた。

交渉する雑誌としては、GastroenterologyやThe Lancet Oncology、Annals of Surgical Oncologyなどが提案された。又、日本と欧米における学会誌や学術刊行物の出版事情の相違について討論がなされた。

3) 消化器発癌国際会議について

第3回消化器発癌国際会議について安井・井藤両教授より説明があった。

Munchen 工科大学Hoeftler 教授を会長として開催予定であった2002年3月の学会が中止となり、2004年2月にMD Anderson Cancer Center のLevin教授がHoustonで学会を開催予定であった

が、事務局の行ったアンケートの結果、出席予定者が少なく、開催は困難との報告があった。この為、第3回を繰り上げて日本で行い学会の活性化を図った上で、第4回をLevin 教授にお願いするような方向で調整中である。具体的には今井教授が当番会長を務める第15回日本消化器癌発生学会 (札幌、2004年8月19・20日、ロイトン札幌) との共同開催の形を検討中である。会長は第4回を予定していた上西教授が繰上げて務める。どの部分を国際学会で行うか、発表を英語にするセッションをどのようにするか、海外から招聘する先生の人選などが今後の検討課題として挙げられた。

4) 第14回日本消化器癌発生学会準備報告

第14回本会総会の準備状況が三輪晃一教授代理の藤村隆講師から報告された。会場は金沢のホテル日航で、本年9月10日 (水) に理事会・各種委員会・評議員会、11・12日 (木・金) に学術集会を開催する。来週には評議員の先生方へポスターと演題募集要項の発送を行なう予定である。演題登録はオンライン登録とのことで5月から6月10日を予定している。

5) その他

次回総会の会告などを掲載したニュースレターが3月末発送を目処に準備中と報告された。

国際学会の繰上げに伴い上西教授が次々回当番会長を辞退し、代替の会長の人選を行なうこととなった (鹿児島大学の愛甲孝教授の名前が挙がった)。

基本としては外科、又は病理基礎の領域で選考を行うこととした。




中外製薬



5-HT₃受容体拮抗型制吐剤
劇薬、指定医薬品、要指示医薬品

カイトリル® 注射液
錠1mg, 錠2mg
細粒

KYTRIL®

塩酸グラセトロン製剤

注意—医師等の処方せん・指示により使用すること

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意、用法・用量に関連する使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。

〔資料請求先〕

輸入製造発売元 **中外製薬株式会社**

〒104-8301 東京都中央区京橋2-1-9

2002年10月作成

Herbert von Karajan

Authorized by "Herbert von Karajan Centrum GmbH"

Photograph © Akira Kinoshita

第3回消化器発癌国際会議のお知らせ

2004年8月19日、20日札幌に於いて第3回消化器発癌国際会議を開催致します。札幌医科大学第1内科今井浩三教授開催の第15回日本消化器癌発生学会との共同開催となります。「Inflammation and Carcinogenesis」「Cancer Chemoprevention」「Cancer Invasion and Metastasis」をメインテーマと致します。近日中に、ファーストサーキュラーを会員の皆様にお送り致しますが、国内外から多くの方のご参加をお待ちしております。

編集後記

一昨年9月のテロ問題がようやく落ち着きを見せてきたところに、イラクに対する攻撃やSARS流行など、世界を揺るがす事件が続発しています。今年はAACRも直前に延期となってしまいましたが、一日も早く世界に平穏な日が訪れ、第3回消化器発癌国際会議（来年8月、札幌）では海外からも多くの研究成果の発表がなされるよう切に祈っているところでもあります。

さて、本年の第14回日本消化器癌発生学会総会は三輪教授が金沢の地で開催して下さいます。本会（当時は日本消化器癌発生研究会でした）の第4回総会（会長：磨伊教授）も金沢で行われました。当時に比較すると自分達の周りの環境はずいぶんと変化しております。研究面では分子生物学的手法の発達とゲノム解析の進展により、ずいぶんと研究方法が変化してきました。臨床面でも手術手技の変化など、時代においていかれないよう頑張らなければと感じる毎日です。ただ、よくよく見てみますと、手技手法が変わったところで『研究のための研究』になることなく、根底に流れる『患者さんのために』という理念は変化が無いように思います。金沢の地での本会総会開催を機に11年前を思い起こし、新鮮な気持ちで今後の医学研究と医療に向かっていきたいものだと考えております。

（学会事務局幹事）

発行 日本消化器癌発生学会事務局

〒113-8655 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学医学部附属病院消化管外科・乳腺内分泌外科内
TEL 03-3815-5411（内線35141）FAX 03-5800-9731

発行者 日本消化器癌発生学会

編集 総務委員会

印刷 株式会社 靖文社

フッ化ピリミジンの新分類

DIF

UFT, TS-1はDIFです。
(ウラシル) (ギメラシル)

抗悪性腫瘍剤(代謝拮抗剤)

UFT ユーエフティ
ユエフティE顆粒

【創薬】指定医薬品 要指示医薬品 テガフル・ウラシル配合カプセル剤
薬価基準収載 テガフル(結晶)・ウラシル配合顆粒剤

抗悪性腫瘍剤(代謝拮抗剤)

TS-1 ティーエスワン、カプセル20
ティエスワン、カプセル25

【創薬】指定医薬品 要指示医薬品 テガフル・ギメラシル・
オテラシルカリウム配合カプセル剤
薬価基準収載

ユーエフティ、ティーエスワンの効能・効果、
用法・用量、禁忌を含む使用上の注意につき
ましては製品添付文書をご参照下さい。

製造販売元
資料請求先
(お客様相談室)



大鵬薬品工業株式会社
〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27
TEL. 03-3294-4527(代表)